

子どもの気持ちを理解する保育者の言葉の使い方

— Thomas Gordon による人間関係への学びについて —

How to use the words of a childcare person for Those Who Understand the Feelings of Children — About Thomas Gordon's study of relationships —

松尾裕美
Hiromi Matsuo

I. はじめに

平成 29 年告示の「幼稚園教育要領」「保育所保育指針」「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」の中で、幼稚園教育、保育所、認定こども園それぞれの保育において、育みたい資質・能力及び「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」が新たに示されている。今回、幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領の改訂は、3 歳以上の幼児期の施設での教育を「幼児教育」と呼び、3 歳以上について共通に捉えると明記されている。また、保育内容の 5 領域については、幼稚園、保育所、幼保連携型認定こども園の 3 歳児以上についての「ねらい及び内容」をはじめ、幼児教育に関する記載が、同一内容が指導として挙げられている。つまり、幼児教育として三つの保育施設の共通性の確保が図られたと考えられる。「言葉による伝え合い」の項目では、「先生や友達と心を通わせる中で、絵本や物語などに親しみながら、豊かな言葉や表現を身に付け、経験したことや考えたことなどを言葉で伝えたり、相手の話を注意して聞いたりし、言葉による伝え合いを楽しむようになる」とある。また、ねらい及び内容では、「経験したことや考えたことなどを自分なりの言葉で表現し、相手の話す言葉を聞こうと意欲や態度を育て、言葉に対する感覚や言葉で表現する力を養う」とある。「言葉による伝え合い」をはじめ、「幼児期の終わりまでに育ってほしい 10 の姿」の、「自立心」、「協同性」、「道徳性」、「規範意識の芽生え」、「社会生活との関り」を子どもの気

持ちを理解しながら、保育者として望ましい言葉かけはどのようなものかを考えていく。Thomas Gordon のコミュニケーション学から保育者の言葉のかけ方による子どもの行動の変容について考えてみる。

II. 幼児教育の見方・考え方・生きる力

幼稚園教育要領、第 1 章 第 1 幼稚園教育の基本の中に「教師の役割」「見方・考え方」「主体的な活動」「一人一人」「環境を構成」「教材」というキーワードが出てくる。幼児期における「見方・考え方」について、文部科学省中央教育審議会答申（2016）¹⁾の中で次のように挙げられている。

○幼児期は、幼児一人一人が異なる家庭環境や生活経験の中で、自分が親しんだ具体的なものを手掛かりにして、自分自身のイメージを形成し、それに基づいて物事を感じ取ったり気付いたりする時期であることから、「見方・考え方」を働かせた学びについても園全体を通して、一人一人の違いを受け止めていくことが大切である。

○幼児教育における「見方・考え方」は、幼児がそれぞれの発達に即しながら身近な環境に主体的に関り、心動かされる体験を重ね遊びが発展し生活が広がる中で、環境との関り方や意味に気付き、これらを取り込もうとして、諸感覚を働かせながら、試行錯誤したり、思い巡らしたりすることであると整理できる。

○またこのような「見方・考え方」は、遊びや生活の中で幼児理解に基づいた教員による意図的、計画的

な環境の構成の下で、教員や友達との関り、様々な体験をすることを通して広がったり、深まったりして、豊かで確かなものとなっていくものである。こういった「見方・考え方」を働かせることが、幼稚園等における学びの中心として重要なものである。

○このような「見方・考え方」は小学校以降において、各教科などの「見方・考え方」の基礎になるものである。第1章 第2に、幼児期に育てたい「資質」「能力」の3つの柱が示されている。幼児教育の段階で育つことを目指す「幼稚園教育において育みたい資質・能力」は「生きる力」の基礎となるものであり、今回の改訂に示されている。

「生きる力」の基礎を育むため、資質・能力の3つの柱、幼稚園教育の基本を踏まえ、資質・能力を一体的に育むよう努めるように掲げられている。

1. 「知識及び技能の基礎」・・・これは、遊びの中で豊かな体験を通じて、何かを感じたり、何かに気付いたり、何かがわかったり、何かができるようになる成功体験が知識や技能の基礎となることを表していると思われる。

2. 「思考力、判断力、表現力などの基礎」・・・これは、遊びの中で考え、試し工夫することで自分がやりたいことに向けて力を育てていくことに繋がると考えられる。

3. 「学びに向かう力、人間性等」・・・これは、「心情」は喜怒哀楽や感性、感じる心、「意欲」は何かをやりたいと思う気持ち「態度」はやりたいことに粘り強く取り組んだり、友達と協力することなどで繋がって育っていきと考えられる。

これら資質・能力の3つの柱は、幼稚園、小学校、中学、高校を通して伸びていくものと捉え、小学校以降になると、「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」など「学びに向かう力・人間性等」は発展していくと考え、幼児期にそれらの基礎が培われ、小学校以上では教科などの指導により成長していくものとして繋がっていると考えられる。

Ⅲ. Thomas Gordon による人間関係論

文部科学省、厚生労働省、内閣府による共通の指導を考えていく中で、それらを十分に「幼児期の終わり

までに育ってほしい姿」へと繋げていくことは、保育者の重大な使命であると考え。保育者と子ども、保育者同士、保育者と保護者等、保育者として意思疎通、指導、伝える力が十分発揮されることが期待されている。自分の意思をどのように伝えるか、相手にどのように伝わるかを考えていくと、Thomas Gordon の、Parent Effectiveness Training 「親業」は「親としての役割を効果的に果たすための訓練」と言われており、親子関係だけに留まらず、人間関係の問題発生前の思考に対して未然に防止する助けとなる方法をコミュニケーションの方法から示している。それらは訓練から学ぶ。親子関係を基に対応の仕方、問題解決の方法などが示されている。「能動的対応」の考え方を中心に保育者として心掛ける言葉の伝え方、言葉の受け止め方が見えくる。保育者として、子どもの前に立つものとして発する言葉を選ぶ重要性に繋げていくことが大切だと考える。

人間は、相手、(子ども、親、友人)を心から受容する気持ちを持ち、そのことを相手に伝えることが出来れば、相手との人間関係は良好となる。相手をありのままに受容することが重要と考えられる。自分は今のままで相手に受容されていると感じると、人はそこから動き出す自由を手にし、思いのままに自分の変身・成長をはかり、能力を発揮する方法を考えられるようになる。Thomas Gordon は著書「Parent Effectiveness Training」の中で『受容とは、小さな種子の中の美しい花となる可能性を育てる、超えた土壌のようなものである。しかし土壌は、種子が花になるのを助けるものでしかない。種子が成長する可能性を目に見えるようにすることはできるが、その可能性自体は種子の内部に存在する。種子と同時に、子どももその内部に発達する能力を包んでいる。』²⁾ 受容は土壌と同じで、子どもが秘めている可能性の実現を単に助けるものでしかない。「子どものため」とこの土壌は非受容の言葉を使い、「評価」「批判」「説教」「教訓」「注意」「脅し」「命令」という反応で良かれと思い行動していると語られている。

Ⅳ. コミュニケーションを阻む 12 の障害

ここで新たに考えてみる必要がある子どもとの対

話、会話で保育者である大人はどのように対応することが望ましいのであろうか。

子ども達が大人の意に反したメッセージを發した場合どのような返事ができるだろうか？ Thomas Gordon氏によると、多くの場合以下の12の言葉で対応していると考えられると語られている。1. 命令・指図 2. 注意・脅迫 3. 説教 4. 忠告・解決法のアドバイス 5. 説得・議論 6. 非難・批判 7. 称賛・同意 8. 屈辱・馬鹿にする 9. 分析・診断 10. 激励・安心させる 11. 質問・尋問 12. 中止・注意を他へそらす・ごまかし・皮肉これらの言葉は、子どもの声を聴く「共感的」からはほど遠く「聴く」というより結果として「反応」していることになる。相手の言ったことを本当に受け取れたかどうか確認する前に、あるいは、受け取りましたよということを相手に伝える前に、問題の解決を急いでいるやり方に感じられる。例えば、「僕、幼稚園に行きたくない」といったとする。この場合どのような対応が考えられるのであろうか。

1. 命令・指図「行かなきゃダメです」「行きなさい」
2. 注意・脅迫「みんなから遅れてもいいの」「行かなきゃあとで困るわよ」
3. 説教「やりたくなくてもやらなきゃいけないことがあるんだ」「幼稚園にはいくべきだ」
4. 解決法のアドバイス「お茶でも飲んだら」「ちょっとゆっくりしてから考えたら」
5. 説得・議論「楽しいこともあるかもしれないよ、行った方がよくない？」「幼稚園は、あなたにとっていろいろ楽しい体験ができるところだよ」
6. 非難「あなた甘えているのよ」「あなたの考えは間違ってるよ」「その考えには賛成できないわ」
7. 賞賛・同意「そうだね、幼稚園なんてつままないよね」「私もそう思うわ」
8. 屈辱「弱虫だな」「バカじゃないの」
9. 診断「甘えん坊に育てた私が悪かったんだね」
10. 安心させる「大丈夫、大丈夫そのうち楽しくなるって」「明日になれば、また違った考えになるんじゃない」「心配しなくても大丈夫、きつとうまくいくよ」
11. 尋問「ひょっとしていじめられてるの？」「いつからそんなこと考えていたの？」「用意園に行かなくて何をするの？」
12. ごまかし・皮肉「あらいやだ、この子不登校でも

なったのかしら」「今その話はやめよう」「同じことを前にも言ったよ」と対応することが予想される。

共感的な対応は、話しの聞き方が重要だと考える。
1. 黙って聞く 2. 相づちを打つ（そうか・まあ・ふーん・面白いね・本当？ そうだったの）etc 3. 心の扉を開く言葉（それについて話して・それについてもっと知りたいわ・ちょっとそれについて話してみよう・あなたにとって大切なことなんだね・言いたいことを簡潔に言ってごらん・あなたは どう思う？ 聞いたいわ）etc これらは、話しを聞くのに使われる手法で、受動的対応と考えられる。

子どもとの会話の中で「あなたは・・・でしょ」など主語が「あなた」となり、あなたに対して發している言葉からは、子どもの心には素直に届きにくい面が多くあると考える。たとえば、帰りが遅い子どもに対しての言葉を考えてみると、「あなた、今まで何やっていたの」「あなたはいつも約束を守らない」と發した言葉に、子どもは怒られると感じ、口応えしたくなる「だって・・・」「でも・・・」と「Dから始まる言葉」で反応してしまうであろう。気持ちがすれ違っていく。主語を変えて、言葉の初めに「私」を持つてくると「私は心配していたのよ」「私は時間になっても戻らないので心配していたの、顔を見てほっとした」と發した場合、子どもは自分を責められているとは感じにくく、親に心配させて悪かったと素直な気持ちで受け入れられると考える。「私」メッセージを出すことにより相手の反応を行動を変えることが出来る。「私が」感じている「私が」心配している思いを伝える言葉となる。保育者としても、子どもの言葉に反応する際に子どもの気持ちを理解し、子どもが自分の思いを表現できる方法として考えることが出来る。

伝えるポイントとして、相手にわかるように具体的な数字、事実の提示を含んで話す。くどくど言わない。変わるか変わらないかは子どもに任せる姿勢が必要となると考えられる。

聴く際のポイントとして、ダメじゃないけど一緒に考えてみる必要がある。あなたがここにいてよかったと思えることが私は大切なんだ。私にわかってもらえなくてあなたは辛かったんだね。解決しようとする言葉は相手の意志、内容、感情を含んで相手に返す。声のトーン・間の取り方が重要と考える。

V. 能動的対応

先に受動的対応を挙げてみたが、子どもの気持ちを感じ取る対応として、ここで能動的対応を考えてみる。子どもには大人・保育者に「理解されたい・わかってほしい」という基本的な欲求があると考えられる。子どもたちに「能動的な聞き方」を使って、わかっている気持ちを伝えるにはどのような方法があるのか考えてみると、

1. 相手の話を繰り返す。

例) 子ども「ほく今日、いじめられたんだよ。」

大人「いじめられちゃったんだ。」

2. 相手の話をまとめて、自分の言葉で言いかえる。

例) 子ども「ほく今日、いじめられたんだよ。」

大人「嫌なことされちゃったんだ。」

3. そういう言葉を口にした相手の気持ちをくむ。

例) 子ども「ほく今日、いじめられたんだよ。」

大人「いじめられたから、とってもつらいだね。(悲しいだね)」これらの方法は、子どもの言葉を傾聴し対応している。答えや指示ではなく、子どもが発した言葉を大人・保育者が受け止めているところから始まっている。Thomas Gordon の「Parent Effectiveness Training」を学んだ幼児教育は、子どもの声に耳を傾けるということを中心として保育に当たっていると考

えられる。筆者も様々なところで活用することとなった。クラスをまとめなければいけない。昨日できなかったことが今日できるようになるためにはどうすればよいか。全体の子どもの心の動きを注意深く観察していくことを心掛けて保育を行っていた。しかしどうしても、命令、指図、注意、解決のアドバイスを行ったり、結果として尋問の形で子どもに聞き出し、その原因と結果を模索することが多くあった。

子どもの気持ちを感じるには、言葉だけでなく、声の調子、表情、しぐさも重要な伝える力、傾聴する力となると思われる。

VI. 行動の変容

子どもとの会話の中で、保育者として思う方向へと子どもを誘導していく言葉や子どもの気持ちは理解できるがクラスの他の子どものことを考えると全体の子どもの動かすことを優先してしまうことが見受けられる。子どもの行動を保育者の考えに従わせるという子どもの行動を不本意に変えさせてしまう言葉の使い方がすることも事実である。松尾(2015)によると、保育者の言動に合わせるのではなく、子ども自身が自ら行動を変えていく結果が示されている。そこでは、子どもに関わる保育者が、「Parent Effectiveness

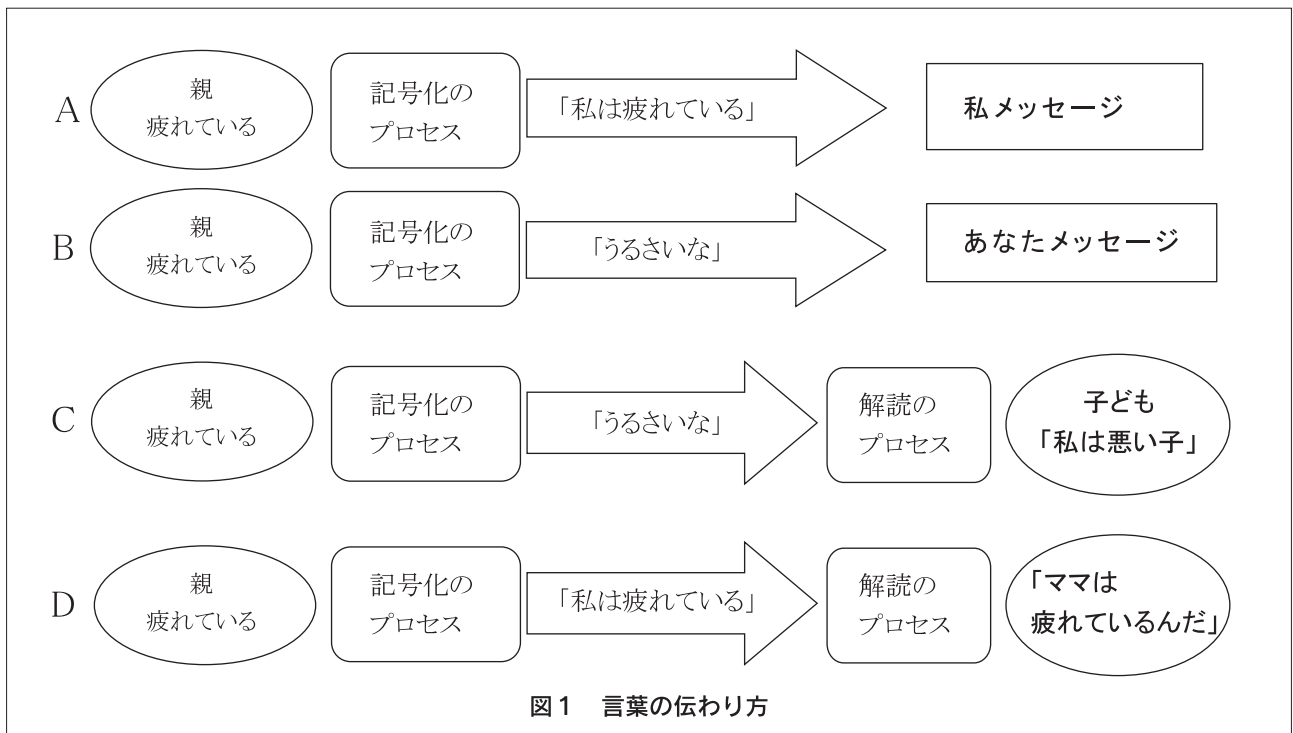


図1 言葉の伝わり方

Training」による「能動的対応」を行うことにより、問題を抱えていた子どもたちが自信を取り戻す様子が書かれている。問題を抱えている子ども達に対して、保育者は命令、注意、訓戒、説教、忠告という対応ではなかった。これらの言葉の内容は、伝えたい大人の意図は、「あなた～しなさい」という表現として伝わってしまう。それを聞いた子どもは反抗する。そして、「自分の行動を変えるべきだ」「変えなければならない」「変えた方がいい」と人に言われてからそうすることに、子どもは抵抗を感じるのである。子どもの行動を変えようとする気持ちが伝わってしまうとある。

「Parent Effectiveness Training」による「能動的対応」では、「私は～を心配している」「私は～が気になっている。私は～のようにしておきたい」という「私が～」という表現の違いである。これらの言葉は、子どもが反抗したり、コントロールされていると感じることがないからである。子どもに対して、非難、判断、評価、からかい、批判の意味を持った言葉を使って子どもの行動を変えようすると子どもは、「やっつけられた」と感じてしまう。この言葉により子どもは、無力感を感じるようになる。自分に対する誇りや自信を無くしてしまうこととなる。つまり、「あなた～」「あなた～だ」「あなた～しなければいけません」と「あなたメッセージ」となる。「私は～」「私はあなたのことが心配」という「私メッセージ」が「Parent Effectiveness Training」にある。この表現を使うことにより、子どもの心が自然と行動を変えていくことに繋がっているのである。ここで「私メッセージ」とは、子どもがある行動をしたから「～しなさい」「ダメでしょう」ではなく、その行動により「私」にどのような影響があるか、また、どのように感じているかを伝えるメッセージである。「私メッセージ」を受け取った子どもは、「事実の提示」「事実の叙述」として受け取る。そして、自分はどのようにすればよいか考える。「私メッセージ」は子どもの行動を変えていくのを、子ども自身の責任で行うきっかけと言える。

Thomas Gordon氏によると、子どもへの接し方が効果的か否かの違いは、「あなたメッセージ」と「私メッセージ」の違いといえれば分かり易いとある。効果的でない表現を検討すれば、不思議なほど主語が「あなた」で始まるか、文節のどこかに「あなた」が入っ

ていることがわかる。「あなた」が入る表現として「やめなさい」「そんなことしてはいけません」「やめないんだったら～」「どうして先生のいうことが聞けないの」などである。ところが、子どもの行動が保育者に受容できないから、先生がどのように感じているかを子どもに伝えることだけを子どもに表現すると、これは「私メッセージとなる。「大きな声で騒いでいると先生ビクッとするんだ」や「先生はみんなに並んでほしいだ」「～だと先生残念だわ、がっかりしちゃう」となる。「あなたメッセージ」と「私メッセージ」2つのメッセージによる子どもの受け取り方の違いを図に表すと図1のようになる。親子による言葉の伝わり方を表している。

疲れているので4歳の子どもと遊ぶ気にならない親の場合、コミュニケーションの図は、図1のAのようになる。もしここで、「あなた」の指向性のある記号を選べば、親は自分が「疲労を感じていることを正確に記号化していないことになる。つまり伝わっていないこととなり、図1のBのようになる。「うるさいな」は、親の疲労感の記号化としては全く不適切である。正確かつ明確な記号はつねに「私メッセージ」である。「疲れているんだよ」「今は遊ぶ気がしないんだ」「休みたいんだ」。これで親が経験している感情が伝達される。「あなたメッセージ」の記号では、感情は伝えられない。親のことよりも子どものことの方が言葉で表現される。「あなたメッセージ」は子ども指向的であり、親指向的でない。子どもはCの図を「評価」と解釈する。D図の方は親についての「事実の叙述」ととる。「あなたメッセージ」は「親」の感情を伝えるのには効果的でない記号である。子どもは、「自分」は何をすべきか(解決策を提示)、または、「自分」はいかに悪い子か(非難または評価)というふうに解釈することが多い。³⁾

VII. 心の成長

子どもの心の中にある、自己肯定感を育てるうえで重要な言葉によるコミュニケーションは、子どもとの関りの中で毎日行われる日常的なことである。しかし、乱暴な子ども、自己中心的な子どもなど気になる子どもの姿が見受けられる。また、一見、おりこうさんで、

聞き分けががよく、いわゆる「手のかからない子ども」の中にも、どれだけ保育の場で充実感や達成感、満足感を味わえているかも気になる子どもの姿もある。子どもの行動を見ているだけでは、問題なさそうであるが、心に目を向ければ、果たして心が満たされ、心が輝いているだろうか。大変気になるところである。言われたことは難なくこなす中からは充実感、意欲、自信を見つけることは難しく感じる。乱暴な子どもの中には、いつも保育者から注意を受け、否定的にみられる子どもだが、その子どもの心に目を向けると「僕を見て」「先生、見て」と発信しているサインであると考えられる。その子の心が、負の形となって動いていることに心を寄せて、その子の存在を認めることが必要になる。自分の存在が認められ、先生に自分が認められたことにより、自己肯定感が形成されると考えられる。心の土台をしっかりと育てることにより、保育者との信頼関係、人を信じる心、人を愛する心、愛される喜びをエネルギーとして、子どもの心が力が育まれていく。親、大人、保育者は子どもの目に見える成長には敏感であり、また成長を喜ぶ。保育者は、昨日できなかったことが、今日できるようになる成長の瞬間に立ち会うことがあり、保護者と共に喜ぶ。目に見える面だけの成長に喜んでいて、目に見えない面の成長に気づきにくくなると思われる。子どもの心を育てるものは、新しいおもちゃではなく、訓練された環境下での達成感でもなく、子どもの心が輝き、動き出す瞬間は、何よりも周りの大人、保育者に自分の存在が肯定されたと思えた時ではないだろうか。今自分が考えていることを、保育者にきちんと受け取ってもらえ、保育者にわかってもらえた時ではないだろうか。目に見える賞賛の裏側には目に見えない子どもの存在を肯定する気持ちが伝わるのが大切だと考える。子どもの安心感、信頼感という目に見えない心の面の成長は「私にとってあなたが大切」と保育者に個々の存在を肯定された時に育ち、立ち上がれるのではないかと考える。子どもの成長に携わる保育者には、その両方の育ちに気づく心に届く言葉を選んで使うことが重要と考える。

引用文献

- 1) 文部科学省 (2016) 中央教育審議会
文部科学省 (2016) 中央教育審議会 答申
- 2) Thomas Gordon 子どもの考える力を伸ばす親子関係の作り方 (翻訳) 近藤千恵 P36
- 3) Thomas Gordon 子どもの考える力を伸ばす親子関係の作り方 (翻訳) 近藤千恵 pp110 ~ 111

参考文献

1. 幼稚園教育要領 (平成 29 年告示) 文部科学省
2. 保育所保育指針 (平成 29 年告示) 厚生労働省
3. 幼保連携型認定こども園教育・保育要領 (平成 29 年告示) 内閣府 文部科学省 厚生労働省
4. Thomas Gordon 子どもの考える力を伸ばす親子関係の作り方 (翻訳) 近藤千恵
5. 鯨岡 峻(著) 保育の現場で子どもの心をどのように育むのか 2017. ミネルヴァ書房